

第二節 習 俗

概 況

昔から受け継がれてきた町内の風俗、習慣も文化の目ざましい進歩と、人々の生活様式の変化の中で大きく変わりつつある。

また生活改善、簡素化など暮らしの中で「ムダ」を省こうとする考え方が広く浸透し、冠婚葬祭への対応はとくに変化があった。

旧来の遺風から脱し、生活の実体に合った姿、形に変化し、なかには消滅さえしたのも少なくない。現在も昔からの流れをとどめ行われているものを主体に、各地区でまた宗旨などによっても多少差異はあるが、

○産 育 ○婚 姻

○厄年・年祝い ○葬 祭

について総合的に表すところのようである。

産 育

「帯祝い」、妊娠五か月目の戌の日を選び、在所から帯が贈られ、妊婦が腹帯をしめ、祝い餅をつけて近親に配る、帯には産婆の手で「寿」と朱書きをすところもあつた。また多くの家では嫁が妊娠すると近郷力長(江南市)の若宮八幡宮へ安産祈願に行き、「お砂」をうけて帰つた。お砂は男の子がとつてくれると男児が、



図4-12 初 宮 詣 り

女の子だと女兒が生まれるとのいつたえがある。
 「里帰り」、出産予定の七、八日前に赤飯をたずさえ在所に帰り出産にそなえた。昔から第一子は里（在所）で出産する習わしがあった。出産のことを「ヨロコビ」とよんだ。

「湯初め生後三日目に

「湯初め」をする、産婆

がきて赤ん坊を浴びせ、

家では小豆めしを炊いて

祝うところが多い。

「七夜」、生後七日目に

名前をつけた。「名づけ」

は家によって異なるが、

父母の意見をきき夫婦で

きめるところが多く、長男には父親の名前を一字入れる家もある。

近親への名披露があると産衣を贈って祝う。赤ん坊は産湯をつかい頭髪をはじめてそる。この日、白の肌着に黄色の着物をさせる。これは黄胆にかからないようにするためだと伝えられている。

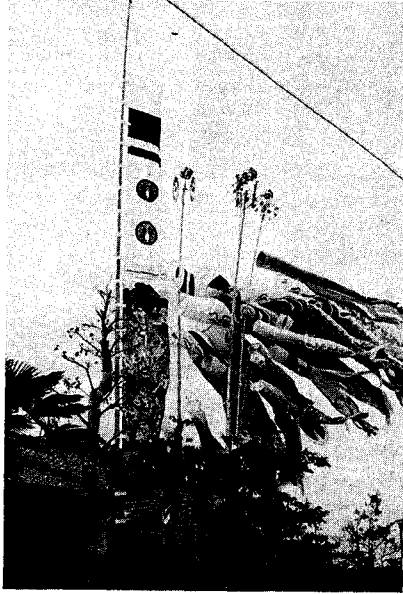


図4-13 鯉のぼり

「初宮まいり」(うぶすなまいり)、男児は三二日目、女児は三一日目(家によって多少異なる)にそれぞれ盛装し、祖母がつきそって氏神様に参拝する。

「破魔矢」、生後はじめての正月には、初児に限って男児には破魔矢が、女児には羽子板が在所から贈られ祝福をうける。「箸そろえ」、あまり行われていないが、生後一〇〇日目、一一〇日目、一二〇日目のいずれかの日に「クイズメ」といい膳につかせ、その子の生育を祝う。(在所は子供に膳部一式を贈る)

「初誕生」、一年目の誕生日には、「誕生餅」を近親へ配る。近親ではこれを祝い、お返しに足につける品物(タビ、ゲタ)を贈るところが多い。

「節句祝い」、節句には在所から女児は「ひなかさざり」が、男子には端午の節句に「幟」が贈られ、近親者からもそれぞれ人形、鯉のぼりなどが贈られる。

「八ツ八月」、といい八才の年の八月には生長を祝い氏神をはじめ、二ノ宮様(楽田、大県神社)にお参りをする。

婚 姻 一般にはヨメリ(嫁入り)とよぶ。仲人のす

すめによって話がはじめられ家柄、財産などの様子が双方に伝えられると同時に、親が相手方の「きき合せ」をした。

「見合い」は、双方の意向をきき仲人が段取りをし、男が女の方に出向くのが通例である。

「結納」、話が成立すると結納をかわした。吉日を選び婿方の父親と仲人が結納(金・物品)を納めるため、嫁の家へ出向き手渡す。

「婚礼」の日はまず婿と近親者二、三人が新客として花嫁方へ行き接待をうける。嫁は座敷で北半畳に敷かれたムシロの上で、水盃で母親に別れを告げ、「嫁入りよう」とはやしたてるなかを婿方の家に着く、婿方では見物の人々に多くの菓子をまく。

嫁がはいた紙緒のぞうりの片方の緒を切つて屋根に上げるところが多い。これはこの家を去らないという誓いのしるしであると伝えられる。

嫁が婿方の家に入る時、待女郎といつて二人の女兒が手を引き(お手引き)座敷へ案内をする。

「里帰り」、婚礼の三日目、嫁が在所へ帰る習わしがある。これを「里帰り」または「膝直し」という。

厄年 厄年は一般に男子二五歳、四二歳、女子一九歳、三三歳としておたがいに厄祓いの祝いをするが、女子年祝い についてはあまり強くいわない。

男子はその年齢になると、その厄歳を祝い、氏神に餅を供え参詣し、親族、知人、近所の人を招いて宴をひらく習わしがある。

とりわけ男子四二歳は人生の転機で、厄歳として盛宴をあげ、餅、引出物を配り、厄を多くの人にもつてもらう。また厄歳の人たちはそろつて国府宮の裸祭りに参詣し厄祓いをする。

年祝いでは、六一歳、七〇歳、七七歳、八八歳がある。六一歳は還暦といい、幼児にもどる(六〇年で再び生まれた干支に還る)という意味で、身内の人々(娘が多い)が赤い肌着、赤頭布、赤い緒の下駄等を贈る。正月にはこれ

を身につけ氏神に詣る。七〇歳の高令を祝う「古稀祝」はあまり多く行われていない。

七七歳は、「喜寿」といい、扇子に「喜」の字を書いて近親に配り長命を喜ぶ。

(七十七の三字を一字にまとめると喜の字に似るところからこの名が起った)

八八歳は、「米寿」の祝いとしてさらに長寿を祝う、祝物として一升ますや「米」と書いた扇子を近親など大勢の人に配る。(八十八の三字を一字にまとめると米という字に似るところからこのように呼ばれる)

金婚・銀婚式
最近では結婚生活二五年の銀婚式、五〇年の金婚式を行う家庭が多くなっている。

葬 祭
死者が出た家は早速近隣(組)へ伝え、組の人が村や親類、知人に通知をする。昔は昼夜をとわず、わらじばきで出かけた話もある。

また「寺行き」といって檀那寺へ行き葬儀の日時を決めてくる。

葬儀全般については組の人々に任せ、家族は一切口出しをしない。組の人は組長(年長者)の指示でそれぞれ葬式の役割りをもち、万端の準備を行う。

出棺時になると、一般会葬者は「野立」といって送葬をする。

土葬、火葬いずれの方法も行われているが、今日では火葬が多く、また「弔い」は家で行われ、喪主と近親者が出棺前に会葬者に礼をのべて終わり、火葬場や埋葬墓地へは近親者だけがでかけるようになった。

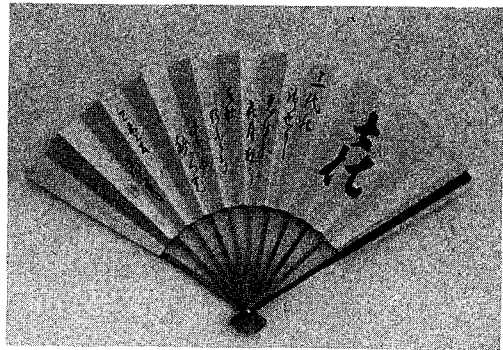


図4-14 喜寿の扇子

葬儀の服装は、喪主は袴、女は白無垢の着物をつけ、はきものは白紙緒のぞうりであった。今日では男女とも黒の礼服に変わったところも多くある。

葬儀の規模は家の格式によりまた、宗旨によつてまちまちである。会葬者は香典を贈る。これに對して一般に香典返しといつて砂糖を渡すところが多い。

死者の衣類は、葬儀の翌日に嫁と娘が水洗いをし、左にしぼり、裏返してナンドの北側に干す家が多い。

葬儀の翌日、近親者、講組の人が夜、葬家の仏前で読経、念仏を唱える、これを無常講とよんでいる。

法要は概ね、初七日、三五日、四九日、百か日、一周忌のあと、三、七、十七、三三、五〇回忌を行う。五〇回忌はトイアゲといつている。

墓は村落のはずれにあるところが多いように見受けられ、埋め墓と引き墓の両方があると、一か所だけに葬るところがある。

第三節 年中行事と農耕儀礼

概 況 往昔から人々の生活、あるいは農業など生産活動の中での折り目として、農事的信仰、宗教的な祭り(遊び日)、すなわち年中行事や農耕儀礼を中心にしたものが、かなり多く行われてきた。

このほとんどは旧暦によつて行われてきたが、昭和二〇年の大戦の終結とともに、新暦に統一された。近ごろその多くは生活様式や労働の変化にくわえ、合理的な考え方への移行によつて、これまで行事を支えてきた一般的な信